

‘The Second Coming’ 管見

池 田 俊 也

An Interpretation of ‘The Second Coming’

IKEDA, Toshiya

I

「再臨」(‘The Second Coming’, 1920: 以下 SC と略記)は W.B.Yeats 後期の詩作の源泉である詩学体系、『幻想録』(*A Vision*, 1925: rev.1937)で詳説される歴史観を簡潔に表現した作品である。全作品の中でも短い方の部類に属するこの詩はその名の示す通り壮大なアポカリプス的世界像をわれわれに提示するが、全体でわずか22行という長さにもかかわらず、豊かなシンボルとメタファーによって人知を超えた歴史の終末の凄まじいエネルギーを一つの凝縮したイメージとして現出させている。Yeats が SC の創作を始めた1919年1月は、第1次大戦、ロシア革命、対英武装蜂起(イースター革命)など国内外の争擾が一応終息した時期であった。だが、火種は残り、混乱と肅正、憎悪と復讐の風が新たに吹き始めたことを詩人は敏感に感じとっていた。同時期の「わが娘のための祈り」

(‘A Prayer for My Daughter’, 1919)の一節“Once more the storm is howling, .../...the future years had come,/ Dancing to a frenzied drum,/ Out of the murderous innocence of the sea”. (CP, 211-12)⁽¹⁾は SC に係わる詩人のこうした心情を端的に表している。が、彼は自らの不安と絶望を惹き起こす原因である歴史的事実を文脈そのままに読もうとせず、「古い神の死と新しい神の誕生」という神話的文脈の中で捉えようとする。換言すれば、2000年に渡ってヨーロッパの文明や文化を支配してきたキリスト教が終焉期を迎え、新しい未知の神が生まれ出ようとしている時代とする認識である。革命や暴動、戦争などの擾乱は従って、やがてくる時代を決定付ける事件であり、新しい世界が誕生する直前の胎動ということになる。Yeats はこうした新時代誕生の予感を SC で謳い上げようとしているのだ。

作品については、N.Jeffares や R.Ellmann をはじめとして『マタイ伝』に記されたキリスト自身による再臨の預言や『ヨハネによる黙示録』に描かれた反キリストを表す怪物と SC のイメージを自然に結び付けて捉えようとする批評家が多く、一般的な解釈として定着しているが H.Bloom はタイトルと内容の不整合性を指摘し、それが W.Blake と P.B.Shelley からの無頓着なイメージの借用に起因すると述べたうえで、“If the good time yet comes, as the faith of Blake and Shelley held it must, *The Second Coming* may impress the common reader rather less than it does now”.⁽³⁾と結論づけている。Yeats の推

敵については最近になって、アイルランド国立図書館蔵の草稿が完全な形で復刻された（1994: Cornell Univ. Press）ため容易に詩人の創作の軌跡を追うことが可能になった。Bloom の分析の足掛かりともなった J. Stallworthy の論考と併せてこれについて考察する必要があるだろう。さらに SC 創作時期にすでに詩人の中で固まりつつあった *A Vision* の歴史観との関係も看過できない問題である。以下、本稿ではこうした点を踏まえて作品を見ることにする。

II

作品は1連8行、2連14行の2部に分かれ、それぞれ現実の世界の不安定な政情の直感的認識と自身が捉えたアポカリプスの幻影の描写である。冒頭詩人は不可視の一本の線で繋がるべき鷹と鷹匠の関係が張り詰め、切り放されたイメージで無秩序な状況下にある世界を暗示する。

Turning and turning in the widening gyre
The falcon cannot hear the falconer;
Things fall apart; the centre cannot hold; (CP, 210-11)

鷹は鷹匠の手を離れ次第に速度を増しながら上昇する。引き戻そうと呼び掛ける鷹匠の声も届かない。繰り返される“turn”と“widen”は共に現在分詞の形をとることで鷹匠の位置を中心に逆円錐形に漸次速度を増幅させながら外へ向かって拡張していく鷹の飛翔運動を示し、同時に反復される同音語“ing”と“in”は内に向かう力を示しているが⁽⁴⁾、強音で [g] と発音される語“gyre”は両方向に引き合う均衡した力の強さを音的に倍加させている。

鷹と鷹匠が何を象徴するかは批評家の解釈が分かれるところで、それぞれ人間とキリストを指すとする Jeffares の意見から、逆に鷹匠が人間を指し、鷹が「人間の自然支配」(his mastery of nature) を表しており、「支え切れない中心」は人間であるとする Bloom の意見まで様々である⁽⁵⁾。鷹を人間と捉えるか、人間の支配力と捉えるかの違いは鷹に意志を認めるかどうかの問題である。離れようとして上昇しているのか、唯上昇し過ぎて鷹匠の声が聞き取れなくなっているのかということだ。Jeffares は聖書にいうアポカリプスの主題に忠実に従うことで、反キリストの出現という預言をこの場面にも重ねているのだ。だから、鷹はキリストから意図的に逃れようとする反キリストの集団であって、彼らは世界の秩序（伝統的価値体系）を破壊しようとする。いわば、歴史の転覆を謀る集団ということになる。一方、Bloom は鷹匠を人間とすることで、人間の意志ではどうすることもできなくなった世界秩序の崩壊（人間の支配力を超越した歴史の強力な力学）だけを見ようとしている。そもそも、彼は草稿時の主題であったロシア革命後の無政府状態に対する恐怖（それは同じくフランス革命やアメリカ独立革命を預言詩で謳った Blake や Shelley からの語句やイメージの借用からも明らかのように）は最終稿でもキリストの再臨と反キリストの出現、また両者の最終戦争（ハルマゲドン）という聖書の預言を表現するまでには至っていないとし、草稿に記された“The Second Birth” (“antithetical Divinity or spirit” : キリストの再臨とは全く無関係なスフィンクスの再生)こそ内容に相応しいと考えている⁽⁶⁾。いずれにしても、このような意見のくいちがいは聖書でいう再臨の預言と作

品の“*The Second Coming*”とを同一視して受け取るか否かに起因する問題であり、作品自体の明確なイメージと圧倒的なエネルギー描写の魅力が減少するわけではない。ここで問題は作品の中で直線的時間意識に根ざす聖書の歴史認識と円環的時間意識に基づくYeatsの歴史観がどのように結び付けられるかの検証にある。

Yeatsによれば、人間の精神や歴史は2つの咬み合った円錐形で表され、それぞれの円錐の頂点が一方の基底部に接した形を作っている。この2つの円錐はそれぞれ基底部から頂点、頂点から基底部に向かって反対方向へ螺旋状に旋回（gyre）するが、その渦巻の線上を移動する点が一方の円錐の頂点から基底部に達すると、逆転してもう一方の円錐の頂点から再び螺旋を描きながら基底部へと向かい、互いに拡大と収縮を繰り返すのである⁽⁷⁾。これを歴史に当てはめると、“gyre”は周期的に回帰する円環的歴史となる。

This figure is true also of history, for the end of an age, which always receives the revelation of the character of the next age, is represented by the coming of one gyre to its place of greatest expansion and of the other to that of its greatest contraction. At the present moment the life gyre is sweeping outward, unlike that before the birth of Christ which was narrowing, and has almost reached its greatest expansion. The revelation which approaches will however take its character from the contrary movement of the interior gyre.⁽⁸⁾

つまり、外向きに拡大（“expansion”）する力と内向きに収縮（“contraction”）する力の関係が歴史における時代の盛衰を表わし、一時代の終息期に次の時代の特徴が啓示の形で現れてくるということなのだ。Yeatsはこの周期を2000年とする。

What if every two thousand and odd years something happens in the world to make one sacred, the other secular; one wise, the other foolish; one fair, the other foul; one divine, the other devilish? What if there is an arithmetic or geometry that can exactly measure the slope of a balance, the dip of a scale, and so date the coming of that something?⁽⁹⁾

この2000年という数はしかし、正確であるはずはなく、またその必要もない。過去の終末論神話が示すように、預言者が世界の破滅を予告した年には実際何も起こることはなかったし、黙示的預言とはそうしたものであるからだ。Yeats自身キリストにまつわる聖霊降臨や受難から数えて2000年後に再臨が起こると信じていたかどうかは疑わしい。確かなのは、F.Kermodeも指摘するようにYeatsが「それをあるかたちで信じていたのであり、黙示録を戦争と結びつけて考えていた」⁽¹⁰⁾ことであり、現代を終末に繋がる過渡的時代と見ていたということである。彼が具体的な数字をあげるのは過去の文明の消長がその年数に集約できるからに過ぎない。

これを実際のヨーロッパの歴史の流れで見ると、B.C. 2000年頃にエーゲ、クレタ文明を基に成長したギリシャ文明はその隆盛期に入った時期に発生したローマ文明（B.C. 750頃）によって徐々に侵食されポエニ戦役後に滅びる（B.C. 146）。同時に、ローマ帝国はその隆盛の時期に登場したキリスト教を受容した後で東西に分裂し（A.D. 395）、それぞれ15世紀半ばまでには滅ぶ。また、キリストの誕生をもって祖とするキリスト教も教皇グレ

ゴリー 7 世（在位1075～85）の時期に世俗的権力の隆盛をむかえて後はルネッサンスと宗教改革を経て次第にその権力を衰退させていく。代わりに近代合理主義，科学思想がキリスト教のくびきを離れて進化し，ロマン主義及び産業革命を経験して Yeats が言う SC の時代となるのだ。いわば，キリスト教が生んだ文化の“gyre”がその先端に向かって拡大を終え，まさにその力の尽きんとする瞬間に直面しており，あらたな神が誕生する胎動の時代なのである。聖書ではキリストの再臨，ハルマゲドン，至福千年，大審判，神の支配をもって歴史は永遠に閉じてしまうが，Yeats は再臨を新しい文明誕生の前兆と捉えるのだ。

さて，第 1 連の後段になると，具体的なイメージを持ち出すことによって，詩人は終末的現実の世界を描く。

Mere anarchy is loosed upon the world,
The blood-dimmed tide is loosed, and everywhere
The ceremony of innocence is drowned;
The best lack all conviction, while the worst
Are full of passionate intensity. (CP, 211)

ここでいう“anarchy”は革命後の無政府状態を指すが，広義的には伝統と伝統に裏打ちされたヒエラルキーが崩壊した混乱状態のことであろう。伝統的な価値体系が社会に存在し，確固たるヒエラルキーの枠組みの中でそれぞれの階級の人間が自分の属する階級固有の「儀式」に従って生きれば整然とした秩序ある世界が保たれると Yeats は考える。

“...the minds that I have loved,/ The sort of beauty that I have approved,/ Prosper but little, has dried up of late”, (CP, 213) と別の詩（‘A Prayer for My Daughter’）でも現状を憂う彼は習わしと儀式の重要性を説く。

How but in custom and in ceremony
Are innocence and beauty born?
Ceremony's a name for the rich horn,
And custom for the spreading laurel tree. (CP, 214)

この“ceremony”と SC 中の“the ceremony of innocence”とは全くの同義であり，革命がもたらす「血で濁りきった潮」に溺れる，儀式を重んじる伝統的な階級を指している。『黙示録』のサタンの「解き放ち」(“loosed”)を連想させるような，“loosed”の反復と“drowned”に抗い難い歴史の流れ（宿命）に翻弄される旧支配階級の姿を読み取るとは容易である。もっと具体的に言えば，旧支配階級とはロシア皇帝とその体制に属する貴族，地主たちであり，近くアイルランドでは Yeats も属し，19世紀以後急速に衰退しつつあった“Anglo-Irish Ascendancy”といわれるイギリス系アイルランド人たちである。この人々が文化を創造したことを彼が高く評価したことをあらためて言う必要もないだろう。“The best”と“the worst”と呼応する一対の語が Yeats の価値判断を十分に表しているからである。激しい情熱に満ちた革命の嵐がその血塗られた潮で無垢な最善のものを飲み込んでしまうと，「儀式や習わし」はもはやその確信も説得力をも失ってしまうのだ。草稿に残る詩句，“...ceremonious innocence has died,/ ...And the mob fawns upon the

murderers” .(MRD,147)⁽¹²⁾ はより具体的に没落階級の悲劇を語っている。

III

第1連が終末を予想させる世界の情況描写であるとするなら、第2連はSCの中心となるYeatsの幻視、即ち終末的黙示である。前者の“mere anarchy”はここで決定的な人類の宿命へと変わる。

Surely some revelation is at hand;
 Surely the Second Coming is at hand.
 The Second Coming! Hardly are those words out
 When a vast image out of *Spiritus Mundi*
 Troubles my sight: (CP, 211)

“some revelation”は第1連の得体の知れないものの存在の予兆と不安を受けて曖昧な表現となっているが、続く“Second Coming”と同族語として根底では繋がっているために互いの言葉の間に違和感はない。ここはやはり、Bloomが言うような草稿の“Second Birth”であってはならない。全体的な意味の厳密さの問題はともかくとして、語の重さや衝撃の度合いは「再臨」というシンボリカルな固有名詞の方がはるかに勝り、その後に来る“a vast image”の出現との繋がりを自然なものにするからである。

ふと詩人の口を衝いて出たこの“Second Coming”は存在感を暗示する共に繰り返される2対の“Surely”と“at hand”によって確実に形象化される。Ellmannはこの13行の途中迄、“...the reader can still hope that the Second Coming will be Christ’s beneficent although awesome reappearance. But with the word ‘troubles’ and the description of the image this hope is converted to fear”⁽¹³⁾と指摘しているが、期待感はあるも僅かなものでしかないだろう。第1連の「善と悪」の逆転、解き放たれた血生臭い暴力の横暴が「期待感」を霧散させる程に圧倒的であるからだ。むしろ、不安が現実のものとなり、読み手は詩人と共に“a vast image”に戦慄する。この“a vast image”も同様に曖昧な表現ではあるが、それはYeatsが意識的に創造したものではなく、「世界霊」あるいは「宇宙霊」(“*Spiritus Mundi*”)によって与えられたイメージとするためだ。Yeatsが“a general storehouse of images which have ceased to be a property of any personality or spirit”⁽¹⁴⁾と説明するように、意識の奥底に埋もれていたイメージのその突然の訪れに抗えないものでもある。いわば、個人の力では制御できない太古の記憶とも言うべき、人間が共有する記憶である。詩人は抽象的な観念を用い、曖昧な表現に終始することで、作品に普遍的な意味づけをしようとしているのだ。いわば、個人的なイメージの神話化である。

意識の闇の奥から浮かび上がり、詩人の視野を遮る巨大なイメージは常識的理解を超えた“vision”である。

... somewhere in sands of the desert
 A shape with lion body and the head of a man,
 A gaze blank and pitiless as the sun,
 Is moving its slow thighs, while all about it
 Reel shadows of the indignant desert birds.(CP, 211)

ここでも詩人は“somewhere”, “A shape”, “shadows”, “desert birds”などの曖昧な言葉を使うが, “lion body and the head of a man”という非現実ながらも明確なイメージ描写をすることで預言の重厚さ, 不気味さを提示している。明らかにスフィンクスの姿を思い起こさせるように, 人間の頭とライオンの体躯をして砂漠にうずくまる生き物はもはや石造りの物質ではなく, その重い腿を緩慢に動かす生命体である。砂漠に照りつける虚ろで無慈悲な太陽のような眼差しにはまだ自由な活動を許されない静けさを感じられるものの, 回りを飛び交う怒りに満ちた砂漠の猛禽のざわめきはこの怪物がいったん活動を始めた時の破壊力の凄まじさを十分に予測させる。

Yeatsの幻影はやがて砂漠から立ち上がって世界を破壊し尽くそうと構える怪物の, 活動直前の緊張感の張り詰めた画像である。さらに言えば, この「怒りに満ちた砂漠の猛禽たち」(“the indignant desert birds”)の怒りとは第1連の最終行にいう「悪なるもの」の“passionate intensity”, すなわち「善なるもの」の確信を揺るがす激しい熱情であろう。Yeatsの幻影はこうして時代交代直前の世界を視覚的に描いてみせるのだ。革命はその後に続くさらなる殺戮の時代の前兆, つまり生まれ出ようとする怪物の回りを旋回する「猛禽たちの影」にすぎないのである。

来たるべき未来への不安を象徴する幻影の後, 詩人は一つの確信を得る。

The darkness drops again; but now I know
That twenty centuries of stony sleep
Were vexed to nightmare by a rocking cradle,
And what rough beast, its hour come round at last,
Slouches towards Bethlehem to be born?(CP, 211)

Yeatsの確信は中心は“twenty centuries of stony sleep/ Were vexed to nightmare by a rocking cradle”, である。この“a rocking cradle”を“the indignant desert birds”との関係で現実の世界の嵐と取れないこともない。揺りかごが誕生の象徴でもあるからだ。とすれば, 文字通り2000年の大記憶の底に眠る人類の狂暴な心が何かを煽り立てる「揺りかごの軋み」によって目覚めようとしているということになる。だが, ここは批評家たちが指摘するように, “stony sleep”, “a rocking cradle”はそれぞれ神話を想起させるような呪術的な眠りと幼子キリストの眠る揺りかごを象徴し, スフィンクスの2000年にわたる不動の眠りはキリストの再臨を連想させる揺りかごの軋む音によって悪夢にうなされるとする方が続く“Bethlehem”との関係からいって自然である。また, その悪夢の意味するところが, 聖霊の降臨によって反対方向の“gyre”が収縮し, 歴史の舞台から去って深い眠りに関する異教の神や人類の遠い過去の追憶なのか, 封印を解かれる直前の『黙示録』の反キリストの象徴, “beast”の武者震いなのか明確ではない。確かなのは世界に破滅をもたらすものの誕生がもうそこまで迫っているということである。

最後の2行, “And what rough beast, its hour come round at last,/ Slouhes towards Bethlehem to be born?”には母性愛と無垢な幼児性を象徴する聖母子と彼らを踏みこむととて厳然として時を待ち蹲る猛獣との強烈なコントラストがある。“come round”には頂点から基底部へ向かう“gyre”が拡散しきって, 一つの完全な円環を完成させようとする「動き」を表している。その円が完成する時, Bethlehemに生まれるのはキリストで

はなく、狂暴な新しい神であり、キリストもキリスト教文明も歴史の彼方へ消え去ってしまうのである。だが、この2行の問い掛けに、不安と恐怖を抱きながらも Yeats の意識の片隅に “rough beast” の出現を無意識のうちに待つ気持ちはないだろうか。一切のものを破壊し尽くそうとする野獣のエネルギーに詩人はある種のエクスタシー、悲劇的結末のカタルシスにも似た壮快さを感じてはいないだろうか。Kermode は「黙示録的思考の最も恐ろしい要素は、あらゆるところで流血がなければならぬというその確信である。イエーツは、もっと実践的であるがゆえにいっそう危険な人びとの思考に付きものであったあの情熱をいくぶんか共有して、これを歓迎した。」⁽¹⁶⁾ と言い、Y. Winter も同様に、“...we may find the beast terrifying, but Yeats finds him satisfying — he is Yeats’s judgement upon all that we regards as civilized. Yeats approves of this kind of brutality”⁽¹⁷⁾ と指摘する。この Winters の解釈に対して、Cullingford は反論するが、一方で “In the poem’s ambiguous balance of terror and fascination, terror seems uppermost”⁽¹⁸⁾ と “beast” を待望する Yeats の心情の一端を認めている。このようなことが語られる根拠は確かにあって、彼のキリスト教 (“Irish Catholicism”) 嫌いや民主主義嫌いはつとに知られている⁽¹⁹⁾。キリスト教の教条主義的な個の抑圧と民主主義の「個人の自由」の履き違えが現在の混乱状態を生み出した原因だということだ。とすれば、秩序を取り戻すために革命やファシズムの狂暴な破壊的エネルギーは必要悪としての存在価値が認められることになる。

これを証明するかのように、Yeats は後に ‘The Gyres’ (1938) の中でこう謳う。

The Gyres! the gyres! Old Rocky Face, look forth;
 Things thought too long can be no longer thought
 For beauty dies of beauty, worth of worth,
 And ancient lineaments are blotted out.
 Irrational streams of blood are staining earth;
 Empedocles has thrown all things about;
 Hector is dead and there’s a light in Troy;
 We that look on but laugh in tragic joy.

.....

The workman, noble and saint, and all things run
 On that unfashionable gyre again. (CP, 337)

ここでも SC が提示したテーマが繰り返され、“Old Rocky Face”, “ancient lineaments”, “streams of blood” など SC のイメージを髣髴とさせる語句が並んでいる。詩人の死の前年に出版されたこの詩の背景にもやはりファシズムの台頭、第二次大戦を予感させる世界の混沌とした情勢があった。だが、ここで、詩人は “laugh”, “tragic joy” と歓喜の声をあげる。血に染められた大地も破壊された文明もやがては “gyre” の旋回とともに再び豊穡の大地となり、新しい文明のもとで高貴な時代を迎えるだろうという確信があるからだ。あらゆる物を地と水と火と大気の混合と捉えた Empedocles は血潮におおわれた大地に種を撒くようにもうすべてを撒き散らした。あとは “gyre” の巡り来る時を待たばいいからである。

流血と破壊の状況の最中の壮快さ、悲劇的情况下の歓喜、キリストの再臨（救済）と新たな神スフィンクス（滅亡）などのパラレルな描写は曖昧さ、両義性など決定不可能な性格を帯び、批評家たちを混乱させている。が、ある意味ではこうした特質こそが SC の魅力のひとつであって、Yeats の代表作の一編に数えられる所以でもあるのだ。

IV

ところで、SC には草稿が残っていて、先に述べたように最近になって完全な形で出版された。構成、語句、内容から現在の形に近く、“The Second Coming” のタイトルを付された 2 枚を除く残りの草稿から、現在の形になるまでの詩人の意識が変化していった過程を窺い知ることができる。最後に、草稿と完成稿とを比較し、詩人の変化の性質について検討することにする。SC の創作にあたって Yeats の念頭にあったのはまず革命後の肅正の嵐であった。書簡も J.Hone の伝記もそこは明らかにしていないが、ロシア革命後の混乱やイースター革命後の軍事裁判の伝聞、報道を通して直感的に時代の変化を読み取ったに違いない。草稿に残る具体的かつ特定の固有名詞がその辺の事情を物語っている。イメージの中心にあるのは「儀式を重んじる、罪のない（無垢な）人々」（“ceremonious innocence”）の悲劇である。

(1・2 稿) Things fall apart—at every stroke of the clock

...ceremonious innocence has died,
While the mobs fawn upon the murderer
And the judge nods before his empty dock
And there is none to pluck him by the gown (MRD, 147-149)

前後関係から 2 枚の草稿の削除部分を省略して続けたために、多少散文的になってしまったが、ここは被告（支配階級）の弁明もなしに裁判官が即決で死の判決下す描写で、流れ作業にも似た不気味な風景である。ロシア革命では皇帝とその家族たちが、またイースター蜂起では指導者たちが猶予も与えられず死刑を宣告され、処刑された。

(3 稿)

...scarcely
is armed tyranny fallen when (sic)
When the mob bred [? anarchy]
take[? s] it place. For this
Marie Antoin ette (sic) has
Most [? brutally] [? died], &
Burke has [? cried]
With his voice
Arraigns revolution...
.....
The German s (sic) are but [? now/ had] to Russia come
Though every day some innocent has died (MRD, 151)

ここでも詩人は現代の革命をフランス革命の混乱と結びつけ、ドイツ軍によるロシア侵攻

にもかかわらず滅び去る王朝の末路に思いを寄せる。

ところが、第2連の創作に入ると、このような特定のイメージが消え、徐々に現在の形のような形に近づいてくる。それぞれ4, 5, 6稿では未完成ながら、第1連には“gyre”や“falcon”, “falconer”, “dimmed tide”, “the ceremony of innocence”などのキーワードが現れ、革命の普遍的な意味付けの段階に達したことを物語っている。Bloomが問題にする“the second birth”もこの段階で出てくる。第2連に絞って見ることにする。

(5稿) Surely some revelation is at hand
 Surely[the second birth: deleted] The Second Coming is at (sic)
 The Second [Birth: deleted] Coming.
 Scarce had the words been spoken
 And new hierarchy’s rent as it were cloth
 Before the dark was cut as with a knife
 And a [stark: deleted] vast image out of spiritus mundi
 Troubles my sight – A waste of desert sand
 A shape with lion body
 And the head of a man
 An [eye: deleted] gaze and
 blank & pitiless as the sun
 Moves its slow [feet: deleted] thighs, while
 Shadows of the indignant desert birds [cry: deleted] (MRD,157)

(6稿) The darkness drops again – but now I know
 all things
 weary of the [? Egipitian] sleep [at last: deleted]
 Sleep stony
 For twenty centuries its stony sleep
 Were vexed to night mare (sic) by a rocking cradle
 And now at last, by jelousy stung awake
 It has set out for Betheltem (sic) to be born.
 –its hour come round at last
 And what rough beast toward bethelem (sic) to be born
 Slouches toward Betheltem (sic) to be born (MRD,159)

多少整理したにもかかわらず、いささか長い引用になってしまったが、詩人の幻影、覚醒後の認識の原形は以上のようなものだった。Stallworthyは5稿で削除された“knife”と“cloth”が再臨の「時間」を限定しすぎるし、“eye”と“feet”はあまりにも人間的なイメージでありすぎる等の原因で書き換えられたのだろうと推測し、スフィンクスの出典について、若い頃からYeatsには怪物と砂漠のイメージが付きまっていたと述べ、それがShelleyの‘Ozymandias’にあると指摘している⁽²⁰⁾。“...Two vast and trunkless legs of

stone/ Stand in the desert.... Near them, on the sand,/ Half sunk, a shattered visage lies....” (from ‘Ozymandias’) Bloomはこの箇所について、さらに Blake からの引用、
 “But Urizen laid in a stony sleep/ Unorganiz’d, rent from Eternity...” (from *The Book of Urizen*)を加えて、“Yeats’s poem then is about the second birth of Urizen or the Egyptian Sphinx, but in a context of revolutionary and counterevolutionary violence, the literary context of Shelley’s *Prometheus Unbound*, among other Romantic apocalypse”. と言っている。⁽²¹⁾ Stallworthyは無意識の一致とするが、Bloomは“Romantic Continuity”の視点から意識的なものだとしている。いずれにせよ、Yeatsの両詩人に対する撞着は周知の事実であり、壮大なテーマの創造に際してイメージの一致があることは否定できない。が、それは、特定の事件を濾過し、普遍化させるためのフィルターの役割を果たしたのかも知れない。

Bloomはまた、両詩人の“apocalyptic poems”に対するYeatsの誤解が内容とは整合しない、限定的なタイトルを使用した為に批評の混乱を生み出していると非難している。

“To Yeats, like any other Gnostic, apocalypse is the fiction of disaster, and *The Second Coming* is an oracle of unavoidable future”⁽²²⁾. BlakeもShelleyも革命下の世界に絶望しながらも人類救済に対する希望を持っていたが、Yeatsにとって、終末の黙示はフィクションに過ぎず、SCは避け難い災厄に満ちた未来の神託だと解釈している。だが、Bloomが指摘するように、SCがロシア革命、アイルランド内乱、ファシズム台頭の予感を「再臨」がもつ本来の意味からかけ離れたイメージで描いているとしても、凄まじい破壊を予感させる恐怖と不安はこの詩に意味的に矛盾を感じさせない程の完結さを与えている。1939年に世を去ったYeatsは確認こそできなかったが、その後の大戦による惨禍と革命、内乱と暴動などの歴史的事実は詩人の予感が間違っていないことを証明しており、こうした悲劇が繰り返される限りこの詩が常に新鮮であり続けることは誰にも否定できないだろう。

(注)

(1) W.B.Yeats, *The Collected Poems of W.B. Yeats*, London: Macmillan, 1933; rpt., 1952. 以下、引用後の略記 CP. 及び数字は全てこの版による。

(2) A.N.Jeffares, *W.B. Yeats*, London: Routledge and Kegan Paul, 1971, p.37.

R.Ellmann, *The Identity of Yeats*, London: Faber and Faber, 1954, p.257.

(3) H.Bloom, *Yeats*, New York: Oxford Univ. Press, 1970, p.325.

(4) 櫻井正一郎他, 『イエイツ名詩評釈』, 大阪, 大阪教育図書, 1983, p.215.

(5) Jeffares, op. cit., p.37.

Bloom, op. cit., p.321.

また、Ellmannは前掲書の中で、Bloomと同様に‘falconer’を人間と考え、‘Essentially the falcon’s loss of contact implies man’s separation from every ideal of himself that has enabled him to control his life, whether this comes from religion or philosophy or poetry’. (Ellmann, op. cit., p.259)と書いている。さらに、津田氏は「鷹(人間の営為-歴史)と鷹匠(人間)」(『イエイツ名詩評釈』前掲書, p.215)と捉えている。

(6) Bloom, op. cit., p.318.

(7) T.R.Henn, *The Lonely Tower*, London: Methuen, 1950, pp.195-96.

また、鈴木弘、『イエイツ詩辞典』、東京、本の友社、1994、p.100. ‘gyre’の項を参考にした。

- (8) W.B.Yeats, Note to *Michael Robartes and the Dancer*, 1921, quoted by N.Jeffares, *A New Commentary on the Poems of W.B. Yeats*, London: Macmillan, 1984, p.203. また、Yeats は *A Vision* の中で、同趣旨のことを書いている。

Each age unwinds the thread another age had wound, and it amuses one to remember that before Phidias, and his westward-moving art, Persia fell, and that when full moon came round again, amid eastward-moving thought, and brought Byzantine glory, Rome fell; and that at the outset of our westward-moving Renaissance Byzantium fell; all things dying each other's life, living each other's death. (W.B.Yeats, *A Vision*, London: Macmillan, 1937; rpt., 1962, pp.270-71)

- (9) Yeats, *A Vision*, *ibid.*, p.29.
- (10) F.Kermode, *The Sense of an Ending* (1966), 岡本靖正訳『終りの意識』、東京、国文社、1991、p.116.
- (11) ‘And when the thousand years are expired, Satan shall be loosed out of his prison’. *The Holy Bible*, Philadelphia: A.J.Holman Company, 1942, p.1278.
- (12) T.Parkinson and A.Brannen ed., *Michael Robartes and the Dancer: Manuscript Materials by W.B. Yeats*, Ithaca: Cornell Univ. Press, 1994, p.147., 以下、引用語の略記、及び数字は同書、ページ数を表す。
- (13) Ellemann, *op. cit.*, p.259.
- (14) Yeats, *Michael Robartes and Dancers*, *op. cit.*, p.204.
- (15) Ellmann と Jeffares はそれぞれ, “‘The rocking cradle’ of Christianity has at last made way for its opposite, for Christianity has reached its utmost bound.” (Ellmann, *op. cit.*, pp.259-60) “The poet realizes, by contemplating his vision of the beast and its coming, how dramatically Christ’s coming (the ‘rocking cradle’ of l.20) reversed the previous historical period (the ‘twenty centuries of stony sleep’)....” (Jeffares, *op. cit.*, p.38). と指摘している。また、Robert Snukal も同様に, “But enough psychic energy has been built up to change the direction of our actions — the beast’s ‘twenty centuries of stony sleep were vexed to nightmare by a rocking cradle’”. と述べている。(Robert Snukal, *High Talk*, London: Cambridge Univ. Press, 1973, p.173.)
- (16) Kermode, 岡本訳, 前掲書, pp.126-27.
- (17) Yvor Winters, *The Poetry of W.B. Yeats*, quoted by Bloom in *Yeats*, *op. cit.*, p.323. また、櫻井氏も「一種の晴朗さというべきものが後に残る...。」と言っている。『イエイツ名詩評釈』, 前掲書, p.214.
- (18) Elizabeth Cullingford, *Yeats, Ireland and Fascism*, London: Macmillan, 1981, p.162.
- (19) Ellmann, *op. cit.*, p.260.
- Louis Macneice, *The Poetry of W.B. Yeats*, New York: Oxford Univ. Press, 1941, rpt. 1969, p.120.
- (20) Jon Stallworthy, *Between the Lines*, London: Oxford Univ. Press, 1963, pp.22-23.
- (21) Bloom, *op. cit.*, p.319.
- (22) *Ibid.*, p.324.